

## こんなときこそ人との繋がりについて考えてみよう！

廿日出 好(電子情報工学科)



『友だち幻想一人と人の“つながり”を考える/菅野仁 著/筑摩書房 2008』

やっと入構が可能となり対面講義が再開されましたが、学生さんは家にいる時間が増え、また友達と直接会って過ごす時間も減っているかもしれません。もしくはネットを通じた新しい友人関係を経験しているのかもしれません。家族との過ごし方、友達との過ごし方・付き合い方について、多くの人が新しい経験を積むことになっていると思います。うまく対応できている人もいれば、難しいと感じ悩んでいる人もいるかもしれません。自分の中に閉じこもってみても解決策を見つけるのは難しく、まずは煩わしさ・抵抗(生身の人と付き合う、という意味で)の少ない「本を読む」ことで、解決策を探ってみてはいかがでしょうか。

今回は菅野仁さんの「友だち幻想 人と人の〈つながり〉を考える」を紹介します。我々のように(?)歳をとってくるとある程度人生が俯瞰でき、人付き合いが自然とできるようになっていく(そう感じているだけかもしれませんが)と思われませんが、やはり新しい人との出会い・付き合いが無くなるわけではなく、人間関係には常に悩まされることが多いものです。このように社会・暮らしが常に変化していく世の中ならなおのこと、人と人との繋がり方も常に変化していく必要があるでしょう。この本は、最初に若者が人付き合いを大切に考えているが、うまくいなくて悩んでいるのではないかと、そのような傾向に焦点をあててスタートしています。特に若者は、知識・経験が少なく、他人や多面的な価値観を受容する能力がまだ低いと思われれます。自分が考えている・思い込んでいること(作者はこれを「幻想」と呼んでいるわけですが)と相手の話・考えが違っていると、「あ、この人なんか違う」と思ってすぐ離れてしまったり、年上に説教されると「うざい」とか「ムカつく」なんて言葉・思考により相手との関係を遮断してしまったり、なんてこともよくあるのではないかと思います。

いずれにせよ、作者は、人は基本的に幸福のために生きており、その本質的なモーメントは①「自己充実(自己実現)」と②「他者との交流」であり、後者には、①に繋がる「他者からの承認」を得るためと、「交流そのものの歓び」がある、と書いています。全くその通りでしょうが、上記のような若さゆえの他者との交流の難しさ・わずらわしさもあり、近年の「一人でも生きていける社会」ゆえ交流からの安易な逃避が可能なのが、②を難しくしているのではないかと、このことです。特にコロナ禍でのネットを通じた「深くない」もしくは「サイバーな」「アノニマスな」他者との交流では、他者との交流をうまくこなしていく生身

の経験が得られにくいものと思います。私などは、先輩から「喧嘩するくらい徹底的な言い合いを何度も行わないで、本当に相手のことを分かったり、本当の友達になったりできるわけがない」などと教わりました。早速飲み会の席でその先輩に食ってかかっていったのを思い出しますが、上記のような他者との遮断が行いやすい(センシティブな若者の心を守り易い)状況が、関係の深化を妨げやすくなっているのかもしれない。学力、筋力と同じく、心が苦しむこと・傷つくことなく成長する、なんてありえないのは自明の理なのですが。

この他、異質な他者との距離を測りながらの「並存」「共在」の話や、「フィーリング関係」だけでなくより自然な自由を得るための「ルール関係」、「家族(親と子)の関係」、「教師と生徒との関係」など、各体系を俯瞰しながら、「他人とも深く浅く付き合いながら、人生をにがさを含めて楽しく幸福に生きよう」とするための方法・考え方を、社会学から(難しい専門用語を使うことなく、分かり易く)俯瞰・提案しています。悩んでいる人は本書を手にとって、人との繋がりについて改めて考えてみると良いのではないのでしょうか。

この書籍にもある通り、本を読むことは時間や時を隔てた作者との対談のようなことができ、様々な情報に加えて、他者の自分と異なる意見を吸収でき、情緒の深度を深めることができます。本(他者である作者)を通じた一種の疑似体験ができるわけです(もちろんサイバーでも異なった疑似体験ができるわけですが)。体(健康状態)については You are what you eat.「食べたもので君はできている」わけですが、心(精神状態)や知識、情緒については、自己の経験に加えて、You are what you read.「読んだもので君はできている」ということになるでしょう。学生さんは悪食になりやすく、「悪読」(携帯や漫画、ゲームかもしれませんが)にもなり易いでしょうが、このような時期だからこそ、将来幸せな自分になるため、読書に多くの時間を費やすのは重要なことではないのでしょうか。若いうちに良い本と巡り会えることは一生の宝になることでしょう。